

---

# 滅し屋～夜空に咲く花～

天川 涼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

滅し屋～夜空に咲く花～

### 【Zコード】

N1011D

### 【作者名】

天川 涼

### 【あらすじ】

この世に靈はいる。だからそれを”滅ぼす”者もいる。

副業、高校生。本業、滅し屋。2つの顔を持つ2人は、靈を滅ぼすため今日も夜の街を駆ける！

## 第1話～それが彼らの日常～

「私は、息子には常に自分以外の人のために行動してほしいな。ね？」

その約束を思い出したのは、死んでから3日目の朝

『よし、そつちの公園に追い詰めたよ宗一』

押し当てた携帯から修吾の息切れした声が聞こえてくる。

子供も寝てれば大人も寝てる午前3時。

俺と修吾は真っ暗なこの街の片隅で、1対2の夜の鬼ごっこをやっていた。

もちろん比喩だ。

追う側の俺たちが鬼じゃないからではない。

追われる側が、人間じやないからだ。

「後は任せろ」

修吾の声を聞いた後、俺は電話を切る。

そして電話を切るとちょうど、公園で待つ俺の前に『そいつ』はやってきた。

中肉中背。

背広を着ている。

頭がバーコード。

どこにでもいる普通のおっさん。

見た目だけは。

『はじめまして”幽霊さん”』

皮肉を込めた俺の物言いに、今公園の入り口からやってきたばかりの”幽霊”は本能からか俺を敵だと察しこれ見よがしに怯えた表情を見せる。

おびえているのは本当だらうがやりすぎだ。それで油断したとこ

ろを殺そつて狙い見え見えの、下手な演技である。

俺が高校の制服を着ていいからってなめてるんじゃなかろうか？  
これでも俺は学生が副業で、本職は立派にあんたと敵対している  
わけなのだが。

「ご大層な演技ありがとよ、幽霊さん。今お金持つていないから、  
かわりに成仏させることで払うわ」

俺はゆっくりとした口調でそう宣告する。

演技なんて通用しない。

それを俺の言葉から悟ったのか、幽霊は何事か奇声を発しながら  
その姿からは判断できないような速いスピードで突如俺に迫つて  
きた。

手に持っているは、刃渡り十数センチと見受けられるサバイバル  
ナイフ。

体に当たれば軽症ではすまない。

当てさせないが。

俺は体を右にスッと移動させる。

次の瞬間。

心臓めがけて差し出された右手を、俺は自分でも絶妙だと感心す  
るタイミングでしゃがんでかわす。

そして、思いつきりそのまま右手を蹴り上げた。

幽霊はうめきながら右手からナイフを落とす。

すぐに幽霊は拾おうとその身をかがめたが、遅すぎる。

俺はその隙をつき、がら空きになつた腹に渾身の蹴りを続いて叩  
き込んだ。

ナイフを取るなどできよづはずもなく、幽霊は数メートル後方に  
吹き飛ぶ。

俺はその無様な姿を確認して走り出し、仰向けに寝転んだ幽霊の  
おっさんにまたがる。

幽霊が今度は演技などとは到底思えない顔で怯えた。

それはそうだろう。

”死”が、目の前に迫ってきていたのだから。

俺はゆっくりと右手を幽霊のおっさんのはげた頭に乗せる。誓いを護るために。

「じゃあな」

右手に力を込め、願う。

滅せよ。

そうすれば、後は同じだ。

幽霊のおっさんは瞬く間にその体を粒子のように小さく分裂させながら、空に向かって上つていった。

いつもの”任務”的とじょうに、光り輝きながら。まつたく、最後だけは何度見ても綺麗である。

「あれ、もう終わったの？」

俺がその宙に上つていく粒子を見ていると、不意に後ろから聞きなれた声が聞こえた。

数分前の電話の相手である秋庭修吾あきばはしゅうごその人だ。

「あんなおっさんの幽霊、苦戦もしなかつたつての

「あ、やつぱり？」

「使ってきた武器も普通のナイフだったしな」

「いつも向こうが使ってくる武器なんてそんなものじゃない

「まあな」

俺はそれに後付するように続ける。

「じゃ、今日も任務は終了だ。お互い帰つて寝るとしようぜ」

「そうだね。お疲れ様、宗一」

「お前もな」

携帯を取り出し時刻表示を見れば、午前3時20分。

俺はまだ眠っていない。これでは俺は明日の学校は睡眠授業になつ

てしまつ。

急いで帰つて少しでも多く寝るところ。

俺は修吾と逆方向を小走りで走り出した。

任務完了。

## 「眠い」

朝のホームルームを終えた、俺の通う私立高校2年1組の10分休み。

俺、神崎宗一は眩きながら一番後ろの自分の机に突っ伏した。

眠いのも当然だ。結局昨日は”組織”への連絡に手間取つてあの後2時間しか寝ていないのだから。

まったく、なんで俺は強制的にあんな組織へ入れられてしまったんだか。

……考えてもしようがない。終わつたことだ。

俺がもう今日は睡眠学習でいいやあとか思つてると、頭の上から修吾の声がした。

「宗一、あと3分ぐらいで英語始まるよ」

「知るかよ。俺は寝る。先生が指摘してたらフォローようじく」

「どうやってだよ。ほら、起きて起きて」

呆れたような声を出しながら修吾は俺の体を無理やり起こす。

「分かつたよ、起きりやあいいんだろ起きれば。まったく、昨日の任務で俺はクタクタだつてのに」

「宗一なんてちょっと幽霊蹴つただけじゃない。僕のほうが大変だつたよ。30分近く追い回してやつと公園に行かせたんだから。それよりやれ」

「何だ？」

眠い目をこすりながら先を促させる。

「今日の放課後、僕たちの研究会に報道部の取材が来るんだって」

「あー!? マジー!?」

「うん。本當」

「めんどくさい。」それで今年度3回目だ。ちなみに今は7月初頭。俺たち2人は、自分たちがときたま組織の任務のために夜を徹して活動することを怪しまれないための隠れ蓑として、『ミスティーリー研究会』という同好会を作った。もちろんメンバーは俺と修吾の2人だけだ。

まあ、どうひりこむかげなのだが、ないよりいいだろとこう修吾の案である。

「つたく、またあの長つたらじこと説明するのかよ。本當にめんどうせいにな」

「やうだよねえ。」しても、なんでこんなにたくさん取材くるのかな？ 別に僕たち、特に何をして活動しているわけでもないのに「……多分、誰かさんが非常に感慨深いお顔を持っているからじやないですか？」

俺はじとつとした目で修吾を見る。

まったく、見れば見るほど整った顔立ちである。短めの黒髪に合つよいにまつげは長くて目は切れ長だし、鼻はスッと通つてるし、唇の位置なんかも絶妙だ。

そう、実際のところ、報道部はほとんどそんな怪しげな研究部目当てではなく、『マイシ本當』であることは間違いない。

第一、今年度過去2回の取材のことなど月一発行の学校新聞に載つていなかつたし。

おそらく、この高校名物の学期に1回発行される『特別号』で、学校一とも囁かれていることこのつことを散々特集するのだろう。そんな美貌を持つと自覚していないマイシがどんな顔をするのか楽しみだ。

つてか、それならそう断つて取材しろってな。

いつもなかなか疲れるのだ。毎回毎回、『本當のこと』をしゃべり続けるのは。

「お、そろそろチャイムが鳴るから自分の席にもどれよ、修吾」

「なんか今宗一が言つたことが気になるけど……まあいいや。

即座に考えるのをやめ俺とは正反対の1番前の席に戻る修吾。席に座った瞬間、1時間目の始まりを告げるチャイムが学校に響き、同時に若い新任の教師が教室の戸を開ける。

さて。

じゃ、俺は寝よう。

修吾に向かって言われたぐらいで収まるほど、俺の眠気は軽くないのだ。

後で修吾が何を言おうがかまつもんか。  
おやすみ、俺。

## 第一話～それが彼らの日常～（後書き）

いつもはじめまして、天川と申します。少しずつ更新していく予定ですので、生ぬるい田舎で見守ってくださいとのれしいです。

感想、叱咤激励などなど、あつまましたら「遠慮なくどうぞ」。

## 第2話／滅し屋

突然だが、この世に幽靈は実在する。

たが、世間一般で言われているような人を呪つたり、ましてや未練が残つていたからとか言つて家族の前に現れて感動の再開をするような幽靈などは存在しない。

この世の幽靈とは、”復讐心”。つまり人を恨むような気持ちがあつてこの現世に残るらしい。

もちろん普通の人間は死んだらとつとと上にいく。死んだことがないからよく分からぬが、多分そうだ。少なくとも、復讐心を持たず、または少ししか抱いていなかつたらこの世ならざるとこりには行くようだ。

では、どんな人間が幽靈になるのか？

殺された人間だ。

人は殺されるとき、強い復讐心を心に秘めたまま死んでいく。それは、非常に大きなドス黒い心だ。

その黒い心を持つと、人は死して幽靈になる。強い復讐の心に身を苛まれた殺人鬼へと、その心を変える。

そして、復讐する相手を見つけるまで人を無差別に殺し続ける。幽靈は、一応人の姿をしている。漫画みたいに、人の姿から突然変貌して怪物になつたりはしない。

ただ、幽靈は見た目は変わらずとも人間の身体能力がもつとも高いと言われる18歳頃の身体能力で現世に現れるらしく、足が速ければ力も強い。

それに、大抵の場合武器を持っている。

どんな武器かと言えば、こう答えるのが一番簡単だ。

自分を殺した武器と。

ナイフで刺殺されたら、ナイフに。縄で絞殺されたら、縄に。拳銃で銃殺されたら、拳銃に。

ちなみに、手で殴り殺されたら手で殴り殺そうとしてくる。自分の受けた痛みを思い知れ、みたいな感じらしい。

つと、ここまでが、俺たちの調べた幽霊の正体です……、

「これぐらい説明すれば十分ですかね？」

放課後のミステリー研究会、部室。

俺はいかにも2割本気、残りギャグと言つた口調でここまでのことを見た目の前の椅子に座る報道部の女子生徒に説明した。

見たことがなかつたから、新入生だろ。それにしても長髪で眼鏡をかけてどこか大人びているが、まあいい。

その顔を見ながら、俺の隣の椅子に座つてゐる修吾は半笑いを浮かべている。

まったく、馬鹿らしいことこの上ない。

実はここまですべて本当のことなのだが、1年前から組織に身をおき、幽霊と戦つてゐる俺からしてもいまに信じられないね。

事実は小説より奇なりみいたいな言葉を聞くが、まさにそのとおりだ。

ここまで奇になると、最早向こうもギャグとして受け取つてくれるものである。だから俺たちも本当のこところを話してゐる。

変な嘘を言つて妙に信じられ、自分たちが痛い人呼ばわりされるのもいやだろ、といふこれも修吾の案なのだが……馬鹿らしいね。

さて、じゃあ後は報道部の田の前の女子が今までの話を綺麗に忘れて、コレ田当てとばかりに修吾のイケてる写真とつて円満終了。俺たちは机に広げた状態のトランプで再び遊ぶと。

あ、これももちろん演出である。いかにもミス研は遊びでやつてます、みたいな演出だ。棚にはボードゲーム等も多々あるし、ここまでやって俺たちの話を信じる人間はまずいない。

今回も……そう、半分はそのとおりになつた。

「貴重なお話、ありがとうございました。では

ここまで、いつもどおり。

問題、その後。

「組織の幽霊に関する秘密をここまで話すところとは、覚悟は出来ているようね」

「…………は？」

俺と修吾がその今までとは違つ口調でのせっぱつとした言葉を聞か、固まる。

な、なんで「コイツ、組織のことを知ってる？  
しかしそれを聞く前に俺たちは完璧に無力化せられることにな

つた。  
すなわち、目の前で黒く光るそれに脅されて。  
えっと、アレ、拳銃ですよね？

幽霊とは互角以上で戦える俺たちでも、さすがにいきなり人間に  
そんなあからさまな凶器を突きつけられては何も出来ない。  
俺たち2人は考えるより早くさうにその身を固くする。  
だが、

「まったく、話には聞いていたけど、まさかこじまで洗いざらい全  
部語っていたとはね。さすがに組織自体についてはしゃべらなかっ  
たみたいだけど」

そんな俺たちとは裏腹に女子生徒の口調は大分柔らかかった。  
まるで、部下が何か失敗したことをたしなめる様な口調だ。  
ん？ 部下をたしなめるような口調？

まさか。

「ひょっとして、ハ雲さん？」

「正解。気づくの遅いわよ、宗ちゃんに修ちゃん」

「ちゃん付けはやめてくださいよ」

「同感です」

その声を聞いた途端、女子生徒、いや女子生徒の格好をした女性  
は拳銃を下ろし、眼鏡をはずして長髪のかつらもはずした。

そうして現れたのは、おおよそ女子高生には見えない綺麗なショ  
ートカットの澄んだ目をした大人の女性。

まつたく、半年以上会つてなかつたとはいえ、何で声を聞いても

分かんなかつたんだか。

八雲雲雀さん。政府直属の対幽霊秘密組織での、俺たちの上司だ。

「別にいいじやない。どつちも可愛い私の部下なんだし」

この俺たちをちゃんと付けする人との出会いは、遡れば約1年前になる。

ある事件をきっかけに幽霊が視えて、さらに触れるようになった俺は同じクラスにいた修吾にいきなり『君、かなり靈感強いね。僕も靈感強いから分かるんだけど……え？ 視えて触れる？ よし、じゃあ組織に入つて！』と勧誘され、強制的に夏休みになると同時に新幹線に乗せられ東京の大きくて豪華なビルに連行された。

そこで上司として出会つたのが八雲さんだ。

そこで俺は、彼女にいろいろなことを教えてもらつたのだ。

今八雲さんに語つた幽霊のことや、組織のことだ。

当たり前のことだが、幽霊なんて存在は世間一般には認められない。いることが知れたら大パニックだ。しかし、その存在は決して多いとはいえないが確実に”いる”。

しかも幽霊とは自分を殺した人間への復讐を誓つてその心を黒く染め、無差別に人を襲うようになつた人ならざるモノだ。放置しておいては、幽霊によつて殺される人間が増加する。ワيدショーなんかでよく耳にする人間がやつたとは思えないような猟奇的に刻まれた死体や、忽然と消えた人間などは大抵がそれの仕業だ。

それに対抗するために政府が秘密裏に作ったのが、”組織”だ。

数十年前から存在し、全国から集められた視えて、触れる人がその幽霊を殺すために戦闘の訓練を受けて幽霊が各地で出現するたびに戦う。これはどうでもいいが、世界各国にも似たようなるがある。

最初こそ数が集まらず幽霊が出るたびに本当にどんなところへもそういう人たちは派遣されていたらしが、近年では1つの市に1人か2人の人間を配置できるぐらいには余裕が出来たらしく、昔のように派遣されたりすることもないらしい。聞くとどうやら俺は、

訓練を終えられれば無事もとの学校に戻れ、やることをやれば普通の生活を送ることが出来るとのことだった。

で、そこまでを聞かされた後、俺は高校1年の夏休みをその戦闘の訓練とやらに費やされた。たまたま俺は空手を中学時代までやつていて、それも県大会常連ぐらいの腕を持っていたから夏休みいつぱいでどうにか終わらせることができた。後で修吾に聞いて知ったのだが、素人なら2・3年は当たり前だそうだ。修吾は近くの学校に通いながらとはいえた修了まで4年かかつたらしい。

ただ、幽霊に対しての戦闘法は少し特殊だった。普通、喧嘩などの戦闘は相手との距離をいかに詰め、そして一撃でも早く強く叩き込むことこそが重要になるのだが、幽霊との戦いはちょっとばかし違う。なんと、自分は立った状態で相手を組み伏せろと言つのだ。

理由はある。幽霊は普通に殴つても蹴つても死がない。しかも幽靈なのだから、触れるのはそういう人間だけで、武器なんて使っても無意味で全部通り抜ける。

幽霊を殺す方法は1つ。頭の上に手を乗せ、滅することを願う。すると、幽霊はこの世からあの世へと移るらしい。

なんとも胡散臭かつたが、実践でやってみたらそのようになつたんだから何も言えない。

で、俺と修吾は夏休みが終わると共に地元へ帰り、今の仕事に就いた。お金ももらえるので、就いたが正しい。

そして俺の住む市で事件もしくは事故があるたびに、その犠牲者を夜な夜な探してはあの世に送るという仕事をしながら今に行き着くというわけだ。

ちなみにそのような人間は組織内と事情を知る政府上層部のみで、ではあるがこう呼ばれている。

”滅し屋”<sup>ほりや</sup>と。

「こじてもさあ」

俺が過去の思い出にスリップしていると、八雲さんは椅子にひつかり樂な姿勢を保ち俺たちに言ひた。

「いつもも言つたけど、まさかあんたたちが、ソノモドペラペラと本当のことをしていったとはねえ」

「別にかまわないでしょ。誰も本当のことだなんて思ってもしないでしょうし」

俺が答えると、八雲さんは存外あつたり同意する。

「確かにね～。ただわあ、やっぱりあんたたちの上司としてはあまり本当のことじゃべられると困るわけなんだよねえ。一応、世間的には幽霊つていう存在はないことになってるんだから。だから、次からはもうちよつと嘘も織り交ぜるよりにしてくれない？ ほんの95パーセントほど」

どこが『ほんの』だ。ほとんど全部じゃないか。

「考えておきます」

俺がそう適当に答えると、八雲さんは手に握っていた拳銃を制服のポケットにしまう。たく、そんなモン持つてくるなよな。

それを見ながら、修吾が思い出したようにその制服姿の容姿を見ながら至極もつともなことを問つ。

「そういえば、何でそんな格好してるんですか？」

すると、ふと何かに気づいたように八雲さんは小悪魔的に笑つた。そしてそのままの体を見せ付けるようにポーズを決める。

「似合ひや..」

八雲さんはかなりプロポーションがいい。

正直、そんなポーズをじつと見ると恥殺されそうである」とは言つまでもない。

もちろん言えないが。

「セクシーポーズはいいですから答えてくださいよ、八雲さん」

どうにか冷静さを保った自分に賞賛を送りたい。

「連れないのでねえ。実は今年からこの学校に私の従姉妹が通っているんだよね。そいつが報道部に入ってるから、あんたちの評判どうなのかなあ～って思つてそれとなく話を聞いてみたのよ。2人が怪しげな同好会作つてるのは知つてたからね。で、聞いてみたら従姉妹は信じていなかつたけど、あんたちが幽霊の話を吹聴してるので、怪しげじやない。これは止めさせないとなあつてことで、別の用事もあつたし従姉妹から制服借りてここにきたの」「結局、その制服は遊び心つてわけですか」

「そういうことね」

八雲さんは20もそこそこの年齢の割にはどこか子供っぽい。こんなこと、まともな大人なら絶対やらないので、それを平気でやつてくる。

本人曰く、『人間皆死ぬまで子供』が座右の銘らしいから困り者だ。

職務には割りに忠実なんだけどなあ。

「じゃあ、僕が朝聞いた今日の取材の予定つて嘘だつたんですか？」  
「うん。私、従姉妹が授業終わるまで制服借りれなかつたからね。従姉妹が学校にいる間に修ちゃんにそう言つといてつて頼んだの」「ああ～、そういえば、僕たちに取材があるつて言つていた女の子、言われてみれば八雲さんと似てるかも」

修吾が妙に納得する。

まったく、それぐらいすぐに気づいてくれよ修吾。拳銃突きつけられたときは本当にびびつたんだから。

にしても、取材が嘘つてことになると、じゃあもう今日はいいことの理由はないつてことになるな。

「おし修吾、感動の再開も終わつたんだ。俺たちに会いに来たのはついでらしいし、帰ろうぜ」

そう提案しながら、俺は立ち上がりて机の横に置いておいた鞄を手に取る。

「もう帰つちやうの！？」

宗ちゃんひどいなあ。まあいや。用事

が終わつたら宗ちゃんの家に押しかけるから

「勘弁してくださいよ」

俺の住む市、桜花市は都会ではない。田舎と言つてもいい。深夜だと大通りですら車がほとんど通らない。

そんなところで、ハ雲さんみたいな美人が家に着たなんてのを学校の誰かに見られたら、それだけで次の日どうなるか分からん。

俺がそんなことを考えていると、再び修吾が気になる単語でも見つけたのかハ雲さんにその目を向ける。

「ハ雲さん、さつきから言つてる用事つて、何ですか？」

この人の用事なんてきっとたいしたことじやないだろ？ 修吾。きっと、その従姉妹とやらの家にあるものでも適当に賣つていこうとかそんな感じだる。

あ、そういうえば昨日、俺にこのロッカーにクラスの笹塚に借りた映画のDVD入れっぱなしにしちまつてたんだ。家で見よ。

修吾の質問を俺は右から左に流すことに、俺はDVDを家に持ち帰るべくロッカーに近づく。

「ああ、それ？まあ、あんたたちになら言つてもいいか」

俺はロッカーの取つ手に手をかけ、手前に引く。

「実はね、こここの隣の市を担当している滅し屋がさガコツと小気味よい音を立ててロッカーが開く。

その瞬間、

「死んだの。幽靈に返り討ひこそれで」

「え……？」

そんなハ雲さんの衝撃の言葉に修吾が驚愕するまさにその瞬間、

「は？う、うわっ！」

「きやあ！」

俺は、ロッカーから降つてきた柔らかいモノに押しつぶされた。

同時に、ロッカーから雑多に多彩なものが振つてくる。

棚に並べていないボードゲーム各種に借りたDVD数本に見せ掛けだけの幽靈について書かれているデータラメな本等などエトセトラ

エトセトア……。

それらの猛攻が一通りすんだ後、修吾と八雲さんが同時に口を開く。

「あ、今朝取材があるって言っていた女の子?」「真帆!？」

「うー、ごめんなさい!…」

状況がまったく理解できない俺の上でそれがいきなり謝りながら動き、俺の上から降りる。

どうやら、ロッカーから降ってきたのは人間だったようだ。俺もどうにか起き上がり、その真帆と呼ばれたこれまたうちの制服を着た女子を凝視する。

第一印象。可愛い。

第一印象。目はパツチリ、鼻もスッとしていて、頬がちょっと赤く、しかし活発そうな印象を受ける。

第三印象。俺の主観だが、八雲さんを幼くしてさらに綺麗から可愛くに移行したような感じ。

結論。

「や、八雲さんの従姉妹か?」

「あ、はい! 椎名真帆しいなまほつていいます」

「……なんで、ロッカーから沸いて出たの? 真帆?」

俺は椎名という後輩の女子に向けていた目を、ゆっくりとその声を発した主に移す。

か、顔は笑っているが目が笑っていない……怖い。  
隣にいる修吾なんてすり足で後ずさっているぞ。

そしてどうやら、怖いと思つているのは俺や修吾だけではないようだった。

「お、お姉ちゃん!ごめんなさい! じ、実は私高校の制服2着持つていてそれでそれでお姉ちゃんこの先輩について何か知つていて、それであんなに気になつてそれでちょっと隠れて話し聞いてみようかなあって思つてロッカーに隠れたの別に幽霊のことなんて

何にも聞いてないから安心して… じゃ、じゃあ私はこの辺で帰ろうかな！ じゃ、じゃあね！」

「待ちなさい、真帆」

「はい！」

最早妖氣すら発しかねないハ雲さんが、立ち去り切った従姉妹の椎名をそのやばすぎる田で見つめる。

「怖すぎる。」

「あなた、全部聞いたわかったのね」

「歩き出す。」

語尾にクエスチョンマークが付属するような口調ではない。つまり、ハ雲さんの中ではそれはすでに確定情報なわけで。まさかここまで俺たちの会話を聞いてまでそれが「冗談だと思つよつな人間はいないわけで。

つまりそれは、組織の機密情報が外部に漏れただつてわけで。えつと、つまりそれは、組織の規則にのつると、彼女の口封じをしなければならないわけで……つて！

「ちょ、ちょっとハ雲さん！ まさか自分の従姉妹にそんなことしませんよね！？」

「や、そうですよー 彼女賢そつですし、分かつてくれますつて！」

ハ雲さんの発する気配から俺と同じ結論に達したのか、修也も俺に加勢する。

しかし、ハ雲さんの田の輝きは変わらない。

「宗ちゃん、修ちゃん」

「はい！」

綺麗に声がハモる。

「分かつて」

いやいやいやー 今俺の田の前で尊き生命が失われそうな状況で分かるも何もないだろー！

俺たちがそんな会話を繰り広げる間に、ハ雲さんは一歩ずつその

差を詰めていく。

椎名は半ばわけが分からず、迫りくる恐怖に硬直している。  
そして、ついに八雲さんと椎名の距離がなくなる。

「真帆」

吐息がかかる距離まで顔を近づける。

「な、何?」

「今のは全部嘘。いい?」

「……う、うん」

「宗ちゃん、修ちゃんもいい? 今のはすべて嘘。分かってるよね?」

「……はい。嘘です」

ホツとした。

今この人、本当に従姉妹でも殺してしまってそうな雰囲気だったぞ。

俺は安堵のため息をつく。

まさか、ここまで言われてうつかりでしゃべってしまつほど椎名も物分りが悪いことはないだろ?。

よかつた。

「じゃあ真帆、私は一足先に真帆の家に行かせてもうつから」

「わ、分かった」

「それじゃあまたそのうちにお、宗ちゃん、修ちゃん」

「ええ、また、そ、そのうち」

俺が臆しながらうつ返すと、八雲さんは満足したような顔をして部室を後にした。

の人、敵にまわすと怖いだろ? なあ。

八雲さんに狙われる幽霊に少し同情する。

と、俺が少しの間立ちぬくこと、修面が椎名に向かって声をかける。

「真帆ちゃん、だけ?」

「はい。秋庭修吾先輩ですよね?」

「あ、名前知つてたんだ。嬉しいなあ  
次いで修吾の満面とも取れる笑み。

椎名が一瞬フリーズする。

おいおい修吾、お前、自分の笑顔の凶悪性を少しほは自覚しろよ。  
しかし椎名はそれでも、修吾の笑みからのリカバリーは早いほう  
だった。割りかしすぐに、今度はこちらに顔を向ける。

「それで、こちらの先輩が神崎宗一先輩」

「へえ。俺の名前も知つてたのか」

「それはもう、報道部ですから」

椎名が得意げに胸を張る。

つてか、報道部の人間と言つのは皆が皆学校の全員の名前が分か  
るものなのか？

「そして、2人とも」この部員で、部長が秋庭先輩で副部長が神崎  
先輩」

「まあな。お前は報道部の新入部員で、八雲さんの従姉妹つてわけ  
か」

「はい。えつと、よく分からないんですけど、お姉ちゃんがいつも  
お世話になつてます」

ペコリと頭をさげる椎名。

それを見て、俺と修吾は顔を見合す。

「いつもお世話になつてるのは僕たちの方なんだけどね。真帆ちゃ  
んは、お姉ちゃんと仲がいいの？」

「ええ。多分……ですけど」

「多分？」

「だつてお姉ちゃん、何度聞いても自分の仕事のこと何にも教えて  
くれないんですから。それで、今日こそこそ！って思つたんですけど……」

「なるほど。ああ言われたつてわけか」

「はい……」

俺は数分前の出来事を思い出す。

まあ、人に言える仕事じゃないからなあ。椎名の気持ちも分かるが、八雲さんの気持ちも分かる。

「俺が言える義理じやないが、あまり深入りしないほうがいいぞ。

八雲さんが言つていたように、嘘だと思つことが一番だ

「うん。僕もそう思うな。ごめんね」

「でも

何かを椎名は言いかけるが、こいつのためを思いきりそれを遮る。

「いいか？ さつきは俺たちや八雲さんだったから許してくれたんだ。こんなこと言つたくないが、これがもつと律儀な奴だったらお前はもうここにいないんだ。分かつてやつてくれ、八雲さんのためにな」

「……分かり、ました」

思い悩むように俯いてしまつたが、それでもしつかりそう彼女は返事をした。

気持ちは本当に分かる。高校1年にもなつたら、身近にいる人の職業ぐらい気になるものだ。

だが、このことばかりは深入りさせではならない。さつきの彼女の早口の中身を分析する限りだけでも知りすぎているぐらいいだ。これ以上は無理だ。彼女のためにも。

「分かつたなら、今日はもう帰つたほうがいい。すぐに俺たちも帰るしな」

「は、はい。失礼します」

そう一礼し、椎名は八雲さんと同じく教室を後にす。その姿は、どこか八雲さんに似ていたように見えた。

つて、そういうえば八雲さん、制服のまま廊下出たよな。大丈夫かな。

などその後ろ姿を見送りながら考えていると、

「ねえ宗一」

「なんだ？」

「アレ、どうするの？」

「アレ？」

俺は後方、修吾が指差す方向に向かいゆっくり振り返る。見てしまい、後悔する。しまつた。

「ロッカーの物、ばら撒かれているな」

「僕たちが片付けるしかないよね」

「……椎名の奴。せめて後始末ぐらいしていけよな」

とは言つても、強制的に返したのは俺だ。文句は言えない。

「仕方ない。片付けよう、修吾」

「そうだね」

その後、絶妙のバランスで入っていたらしく入れなおすのに多大な時間を労したこの作業のおかげで。

俺たち2人は、2つほど大きな失敗を犯していくことに気づけなかつた。

## 第2話～滅し屋～（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？  
今後も頑張りますので、お付き合いしていただけるといいです

### 第3話～Hネリー～

翌日。

「そういこやあ宗一に修吾」

「ん? どうした笹塚」

学校の昼休み。

俺と修吾、それに同じクラスの笹塚と西園寺の4人が弁当を広げると同時に、最初に口を開いたのは笹塚だった。

「どうしたじやねえよ。お前等、昨日のこと何か身に覚えはないのか?」

俺にDVDを貸してくれた笹塚が胸に手を当ててみると、わんぱくの威勢のよさでまくしたてる。

「? 何かあつたっけ?」

修吾は首を傾げたが、「ヨイツの性格を考えると俺にはなんとなく予測がついた。

これでも自分がもてているところの自覚の無さによつた修吾と違い、俺はそれなりに察しのつくもつだ。さうに俺は、笹塚、西園寺共に修吾以上に詳しい自信がある。

「昨日、取材にきたのが誰かつてことだ?」

「やっぱ身に覚えがあつたか。女だといつのはもう調べただ。で、どうだつた?」

「ルックスか?」

「聞きなおすまでもねえだる」

そう、まず笹塚は女好きだ。しかも基本的に顔とスタイルで選ぶ。自分のルックスは並なのに高望みしきである。

「そうだな」

おそらく「ヨイツの調べたと断言する女とはハ露さんのことだらう。しかし、俺は学生ということで、椎名のまつを思ひ浮かべる。

「お前が喜びそうな顔ではあつたな」

口リコンだから。

「な、修吾」

「よく分からぬけど、宗一がそつまつならそつなんじやないかな」

「ま、マジで！？ 紹介してくれよー。」

「出来るかよ」

「そこをなんとか！」

「笹塚、今のお前、大分気持ち悪いな」

「う、うるせえ西園寺！」

「逆ギレかい。情けないなお前」

逆に修吾、西園寺は女にそこまで興味を示さない。

修吾は女子と話すぐらいは普通にするが、西園寺は毛嫌いしているところがある。昔酷い振られかたをしたからだろ？。俺もその現場にいたが、あれはひどかった。

「いいかい？ お前はどうやら世間一般に見て可愛いと呼ばれる人間と付き合いたいと思っているらしいが、よく考えろ？ 所詮学生の恋愛など妄想だ。本分は勉強にある。俺はお前を哀れに思うな。そんなことにつまでも気づかずには告白しては振られていくんだから。そんなだと、将来成功しても女に貢がされて終わるぞ」

そして西園寺は妙に饒舌で冷めている。

眼鏡を押し上げながら語る西園寺は理論家といふか現実的といふか。まあ、そんな感じだ。

「お前、ンなこと言つてたら生涯一人身になるぞ」

「笹塚に言われたくはないな」

「告白する勇気のない人間よりもシだ」

「甘いな。俺は結婚などという人生の墓場の代名詞に自ら浸かるうとは思っていない。一人暮らしの何が悪い？ 近年賢い奴はそう考えるから一人世帯が日本で増えているのだ」

「……もういい」

「わかれればいいのだ」

結局、いつも西園寺が馬鹿の笹塚に意図的に詭弁を語り、笹塚が

言い返せなくなつてこの戦いは終わる。

ある意味熱血漢と女嫌いのリアリスト。この2人、俺は水と油ぐらに合わないのになんで一緒にいるんだろうな？ 分からない。

まあ、2年間こうで大きな喧嘩もほとんど起きないのだ。口じゃあこうでも、仲がいいのはお互い無いものを持つてるからかもしれない。

そんなことを考えて、1人納得する。  
と、そのときだった。

お互いの見合させた顔が何かに反応して驚きの表情を露にする。  
俺と修吾の携帯が同時にバイブル機能により震えたのだ。

同時、とくれば送信元は学校外なら友人の可能性が高いが、学校にいる時間帯だと大抵が組織がらみの人間だ。それも、普段組織は携帯にメールなど送らない。基本的に幽霊駆除は個々が勝手にやるものだからだ。まあもちろんサボつていればメールや電話はすると思うが、そんな奴の噂は今まで耳にしたことがない。だから、組織がメールをするというのはかなりレアケース。早い話がイコール緊急事態だ。

「ん？ メールか？」  
「うん、ちょっとね」

修吾が断りを入れ携帯をポケットから取り出し、周囲に見られないうちに注意しつつメールを開く。  
もちろん俺もすぐに黒い携帯をポケットからだし、メールを開いた。

そして驚愕する。

「…………マジかよ」

自然と口からそんな言葉が漏れた。  
あり得ないような内容が携帯の画面に刻まれていた。

それは修吾も一緒だったのだろう。口をポカンと開けて絶句している。

だが、俺も修吾も次に取るべき行動はその数秒後すぐに決めた。

「悪い、 笹塚に西園寺。俺、 学校抜けるわ」

「僕もそつさせてもらひつ」

「へえ。 2人が早引けするとは珍しいな。何が書いてあつたんだ？」

「ちょっと知り合いが病院に運ばれたみたいでな」

荷物を鞄に詰めながら口にした台詞は嘘ではない。本当に知り合  
いが病院に運ばれたのだ。

「じゃあ 笹塚、 西園寺。後任せるから」

「あ、ああ。 担任には適当に言つておく」

「助かる」

俺は そう 礼をし 鞄を背負い、 教室を後にしようとした驛け出す。

「じゃあね」

そんな容姿を見つづ、 笹塚はわざと俺たちに聞こえるように愚痴  
をこぼす。

「つたく、 その様子じゃあ、 お前等今日も夜は忙しいのかよ。 今日  
の合コンは2人も誘おうと思つていたのによ。 こうなりや 西園寺で  
もいいや」

「誰がいくか。 俺は今日家族で花火をやるらしいんでね。 それに付  
き合わなきやならないんだ」

「マザコンが」

「弟のためだ。 大体お前はロリコンだろひつ」

「ぐつ」

修吾もほぼ同時に、 突き刺さるクラスメイトの視線を受けながら  
約2名除く 教室を抜け出し、 俺を追つた。

「おいおい、 修吾。 あの人、 が病院送りつて、 一体どういうことだ?  
玄関で靴を履き替えているところへ修吾が俺に追いつく。 答えな  
んかでないと分かりつつ聞いてしまう自分に少し呆れた。

「そういえば 昨日あの人、 隣の市で『滅し屋が幽霊に殺された』と  
か僕たちに教えてくれてたよね」

「そういうやうだったな。 くそ、 ロツカーから人が降つてきたせい  
でそんな異常事態のこと、 すっかり忘れてた」

昨日の自分が情けなく感じられたが、今更嘆いても仕方がない。  
とにかく今は病院に行くしかない。

俺は玄関を出て学校の裏手に回る。この学校の裏手には自転車置き場があり、裏門から敷地外に出ることが出来るようになっているのだ。

しかし、俺は学校に自転車で通つてなどいない。俺は自転車置き場のさらに奥へと走り、よく似た形の別の物の置き場へと向かう。フリーダムな学校で助かつた。

俺は自分の原付バイクにまたがる。

「修吾、乗れ」

「ありがと」

俺が言つより早く、修吾が俺の後ろの開いたスペースに自分の体を入れる。

それを腰にまわしてきた手の感触で感じ取り、俺は原チャリを急発進させた。すぐに学校が見えなくなる。

バイクは大通りへと繰り出し、原チャリの法定速度いっぱい、時速30キロ前後のスピードで進む。こんなときまで交通ルールを守る自分はちょっと偉いと思う。

そう、『こんなときまで』と言つても申し分ない内容のメールだつた。メールにはハ雲さんが今日の朝この市で一番大きい病院に運ばれたことが載っていたのだ。1時ごろまでハ雲さんの病院からもつとも近い俺たちへの連絡がなかつたところを見ると、組織のほうでも確認が遅れたらしい。

ただ、こうしてバイクに乗つている今でも信じられなかつた。あの人は普段こそ少しふざけた感じだが、組織の中でも指折りの力を持つ実力者だ。だからこそ俺たちの上司という立場にいるのだし、常に東京の組織のほうにいる。

ハ雲さんの仕事は俺たちと同じ滅し屋だが、俺とはまったくの別格だ。滅多にないことでも一度しか聞いたことがなかつたからすつかり忘れていたが、あの人は大火事やテロなどで多数の幽霊が現れた

場合にのみその現場に行き幽霊を滅ぼす、非常勤の滅し屋だつた。それも、あの人の手際の良さと実力がいいからそんな特殊な役割であることは言うまでもない。

そういうえば、そういう大規模な事件以外。例えば滅し屋を返り討ちにするほどの強力な幽霊が出た場合にも仕事があるってしゃべつてた気がする。

くそつ、ここ最近そんな大事件なんてなかつたから、あの人人がそんな用事でこっちに来ているなんて思つてもいなかつた。メールには、八雲さんの生死については触れられていなかつた。つまり組織のほうでもそこまで調べられなかつたってことだ。だから俺たちに学校があるにも関わらず病院に向かわせた。

「無事でいてくれよ」

自然と口から無事を祈る言葉がこぼれる。

早く病院について欲しい。

そんな願いが叶つたのか、気がつくとすでに病院が見え始めていた。

桜花中央病院。外科、内科共にこの桜花市でもっとも大きい病院だ。八雲さんは今朝、ここに運ばれたらしい。

俺は駐車場に原チャリを止め、修吾と一緒に表玄関から病院へと入る。

受付には数名の看護士がいた。息つくまもなく看護士に向かつて俺は八雲さんの所在をまくしたてる。

しかし、そんな慌てる俺をよそに、看護士の人は冷静だ。

「今朝入院されました八雲雲雀さんですね。え~っと、803号室です。8階ですよ」

その言葉を聞き俺は素直に安堵し、息を吐いた。安心したのだ。どうやら命に別状はなさそうだし、面会も出来るようだ。

「ありがとうございました。行こう宗一」

「ああ」

修吾に短く返事をする。

そこへちょうどエレベーターが降りてきたので、俺たちはそれに乗り込んだ。

大きな病院だけあり、立派なエレベーターだ。

「ねえ。八雲さんがやられるほど強い幽霊って、どんなだと思つ? エレベーターが上へと向かう短い時間の中、修吾が俺に意見を求めてきた。

「ちょっと考えられないな」

率直に思ったことを口にし、後を続ける。

「あの人の実力は折り紙付だし、幽霊に対しては情けもかけない。お前も分かつてゐるだろ?」

「そりゃあね。でも、事実殺されないまでも病院にいるんだから、存在する」

しかし修吾の言つことも至極まともだつた。当たり前だ。実際に八雲さんはどんな理由があつたにせよ返り討ちにされてここにいるのだ。

「まあな。でも、ここで俺たちが議論しても仕方がないだろ。八雲さん面会できるみたいだし、直接会つて聞いてみようぜ」

「そうだね。あ、着いたみたいだよ」

俺と修吾は八雲さんが入院している8階で降りて、小走りで803号室へと向かう。

幾度か人とすれ違い、その人たちは俺たちの制服姿を見て隣人と何事か囁いていたが、特に何も話しかけてはこなかつた。

エレベーターから少し離れたところにその病室はあつた。ドアの右上に張られているプレートには『八雲雲雀』と記述されている。

「ふう」

俺はドアを開ける前に一度深呼吸をする。

特に深い意味はないのだが、なんとなく人の病室に入るときは緊張するものだ。

「失礼します」

ひつかくような音を立てドアが開かかる。

俺たちは吸い込まれるようにその中へと入った。

その部屋は病院というイメージを損なわず病室は白で統一されており、清純な雰囲気を醸し出していた。

誰が用意したのかベッドの横の机には花瓶が置いてあり、鳳仙花が1輪病人を元気付けるように力強く咲いている。

1人部屋らしく、ドアから最も離れた窓際にぽつんとベッドが置いてあつた。

「ハ雲さん……」

そこに彼女はいた。

「あら宗ちゃんに修ちゃん。どうしたの？」

何故かこちらの氣も知らずに大量の漫画をベッドの脇に置きながら。

もちろん本人はうち1冊を開きながら手に持つている。

「どうしたの、じゃないですよ。これ何ですか？」

「面白いわよ、この漫画。あんたたちも読む？」

「そうじやなくて！ えっと、僕たち組織のほうからハ雲さんが病院に運ばれたって聞いてここにきたんですけど……」

「それは『苦労様』

「なんか、普通に元気ですね」

俺の棒読みの言葉にハ雲さんは笑い出す。

「ハハ、まあね。ちょっと腕にやけどしただけだから」「や、やけど？」

「まさかハ雲さん、後残つたりしませんよねー？」

ハ雲さんの台詞に驚いたのか、修吾は声を大きくする。

ハ雲さんはモデル並のプロポーションを持っている。それに肌も常人より白くて綺麗だ。

俺も修吾もハ雲さんには恋愛感情とまではいかないが、少なからず好意は抱いている。

そんな人をやけどの痕なんかで将来を台無しにして欲しくはない。だが、そんな俺たちの不安を溶かすようにまたハ雲さんは声高に

笑い出す。

「アツハハハ！ 大丈夫大丈夫。確かに少し後は残るけど、そんなに大きなものじゃないし。それにいざとなつたら責任は取つてもらうし」

「誰になります？」

「宗ちゃん」

「え！？ いやまあ俺は別に八雲さんなら……って、何で俺なんですか！」

「冗談だつて。ま、宗ちゃんがこんなおばさんが好きならそれでもいいけど？」

「……遠慮しどきます。散々にからかわれそうですか？」

一瞬『いいかも』と思つた俺つて一体……。

「じゃあ私は修ちゃんでもいいよ？」

「僕も辞退します。きっと八雲さんは僕なんかよりいい人が見つかりますからね」

「口がうまいなあ修ちゃんは。宗ちゃんとは大違い」

「余計なお世話です」

修吾にとつてこの手の話題は日常茶飯事だ。

本人に自覚があるのかは知らないが、口が上手いのも当然だろう。俺が苦笑いしながらそう返すと、八雲さんは持つていた漫画をベッドの脇にある机に置いた。

そして急にさつままで「冗談を言つていたのが嘘のように神妙な顔を表に出す。

「でも、ありがとね。今日学校あつたんでしょう？ わざわざ抜け出してまでお見舞いに来てくれて」

「まあ、上司の心配をするのも仕事のつむですからね。それより、何があつたんですか？」

俺もそれに呼応するように気になつていた本題を切り出す。

修吾もさつきまで弛緩していた顔を真剣な顔つきに変えた。八雲さんは1つ小さく息を吐く。

「ちょっとミスっちゃってね」

そう前置きしてから、ハ雲さんはゆっくりしゃべりだす。

「私が隣の市の滅し屋を殺した幽靈を始末しに行つたのは知ってるよね？ それでさ、私は夜に家をでたの。そして、幽靈の撒き散らす靈力をたどつて私は問題の幽靈を発見した」

靈力とは、幽靈や俺たちのような見える人が持つているものだ。幽靈はその存在を認識していないようだが、俺たちはそれを利用して幽靈の場所を探し当てるだりする。

ハ雲さんは俺たちに向けていた視線を下に降ろす。

「あんたたちが会つたことないと思うけど、その幽靈、もう”自分を殺した人を殺した幽靈”だった」

……会つたことはない。ただ、滅し屋の間で噂になつていいぐらいには聞いたことがあつた。

幽靈は自分を殺した人を殺すためにこの世に残り、その目的を達するまで無差別に人を殺す。

では、仮に自分を殺した人を幽靈が殺した場合、その幽靈はあるの世へ行くのか？

答えはノーだ。この世に生き続ける。

それも少しばかりではなく性質が悪くなる。

まず、幽靈が自我を持ち始める。生前のよつた性格ではない。殺しに快楽を覚え、イカれた性格を作る。

次に、知能レベルが発達する。普通の幽靈は片言でしゃべれるかどうかだが、そいつらは自分の年齢相応の知能を取り戻す。原因ははつきりしていないが、組織の研究員の間では『幽靈が目的を果たすことにより脳が安定し、記憶を取り戻す』という見解が強い。

そして3番目の最後。コレが1番厄介なのが、肉体が少しこの世のモノに近づく。靈感のまったくない人間にまで見えることはないのだが、少しでもあると見えるようになり、また見える人間は標的にされる。さらに、己の意思でこの世の物に触れるようになる。普通の幽靈でも一応命のないものには触ると言えば触れる。だが、

自分からは決して触らない。それに対し、知能レベルの発達によりそういった幽霊は自分の意思でこの世の物を触つてくるのだ。

それはつまり、自分を殺した武器以外のナイフや金属バッジ等はもちろんのこと、まずありえないが下手をすればマシンガンだって使用できるようになることを意味する。

だが、そんな幽霊は過去に指の数を超えるほどもいなかつた。大抵が1日経たずに滅し屋に消されるからだ。

それに、そういういた厄介な幽霊がでてきても、ハ雲さんが負けるとは思えなかつた。確かに頭はよくなるし、力も上がり確実に強くなりはするのだが、ハ雲さんはそれを凌駕するエリートだ。俺たちならいざ知らず、ハ雲さんならてこずりはするかもしれないが負けるとは考えられない。

そう思った。が、黙つてハ雲さんの話を聞くうちに理由が分かつた。

「昨日あんたたちに会つた後にちょっと調べたんだけどね。交通事故だつたんだ。運転手は事故つた後自分だけ車からすぐに逃げたら生きていたんだけど、轢かれた2人の人間はどちらも死亡。そいつは車の炎による焼死が直接の死因らしくてね。ほら、そういうタイプつて厄介でしょ？ 直接の死因が炎に焼かれてだから、武器は使わないけど手から炎を出してくる。でも、私は油断さえしなければ勝てると思ってたし、多少てこずつたけど実際に追い詰めた。でも、そこで予想外のことがあつたの」

「予想外のこと？」

「久々の仕事でさ。相手の強さも未知数だし少しテンパッてたんだと思う。実はそのとき、真帆が私の後をつけてたの」

「し、椎名が！？」

「そ。私の実家つて代々神社でさ。生まれつき靈感が強かつたの。真帆はまだ弱いほうで私みたいに見える触れるつてことはなかつたんだけど、それでも復讐を終えて人間に近づいた幽霊の姿は見えた。幽霊は私より先にその姿を見つけて、私に消される寸前に物陰にい

た真帆を狙つたの。多分顔が似ていたから親類だらうつて分かつたんだと思う。で、私は真帆をかばつて右手にやけどを負つて、その隙に逃げられたってわけ

……後半部分は少し明るい口調に戻つたハ雲さんが事のあらましを話し終える。

「？ だんまり決め込んでどうしたの？」

だが、俺と修吾はしばらく押し黙つたままだつた。  
知つていたからだ。椎名が、ハ雲さんの職業に興味を抱いていたことを。

あいつは言つていた。

『だつてお姉ちゃん、何度聞いても自分の仕事のこと何にも教えてくれないんですから。それで、今日こそこそ！ って思つたんですけど……』

『今日こそこそ』なんて言つてゐることは、過去に何度か似たようなことをやつてたつてことだ。俺たちは氣づこうと思えば気づけた。

でも氣づけずに、おめおめとハ雲さんの後をつけさせ、あいつはとかハ雲さんに怪我をさせる事態になつてしまつた。

椎名は悪くない。確かに尾行は褒められた行為じやないが、教えてくれないハ雲さんの職業に興味を持つことは悪いことじやない。悪いのは俺たちだ。気づけなかつた。椎名がそこまで強くそれを知りたがつてていることに。

昨日の部室で、ハ雲さんが少し厄介な幽霊と戦うことは知つていた。それに椎名がそういう感情を持つていたことも分かつていて。でもどちらも氣づけず、こんな結果を招いた。

俺たちは2つ、大きな失敗を犯していた。

きつと今頃、椎名は自責の念にとらわれている。自分が悪いと思ひ込んでいる。

ハ雲さんも口じやあ明るい風を装つてるが、従姉妹にそう思わせてしまつたことに実際は心を痛めているだろう。

俺にも同じような経験があった。なのに。

「なんで、俺は気づけなかつた？」

「ハ雲さん。真帆ちゃんって、今どこにいるんですか？」

「そんないままだ黙りこくれてる俺よつさきて、修吾が問う。

「さつきまでここにいた。ここまできたら隠し通せないなつて思つて私、真帆に全部教えたんだけさ。それ聞いた後真帆どこかにつちやつたんだよね。でも、まだ病院内にはいると思つ」

「ありがとうございます。じゃあハ雲さん、お大事に」

修吾が俺の手を軽く引く。

「あ、ああ。じゃあ失礼しますハ雲さん」

俺たちはハ雲さんから視線をはずし、背後にある病室のドアを開ける。

「多分2、3日中には退院できるから、組織にはそう連絡しておいて」

「分かりました」

修吾がそれだけ言つて病室の扉を閉め、面会は終わつた。

「椎名に会つのか？」

そして、俺は次は目線を修吾に合わせる。

「うん、そのつもりだよ。きっとさ、真帆ちゃんはハ雲さんの怪我は自分が悪いって思い込んでると思うからね」

自分でも想像がついていたことだが、その台詞を人の口から耳にして俺は1年前を思い出す。

すべて自分が悪いと、思い込むこと。

俺もあの言葉を思い出すまで、そうなつたことがある。だからこそ俺は椎名の気持ちがなんとなく分かる。

「修吾、俺も経験があるから分かる。そう思い込んじまつたら、人はどこに落ちるところまで落ちるぞ？ 人の言葉に耳なんて貸さない。最後まで自分が悪いと、自分を貶めるぞ？」

「じゃあ宗一は、今もあのことは自分が悪いと思つてる？」

「… それは

否定しようとしたところに、さらに修吾がそれを許さず続ける。

「宗一が違うんなら、今宗一が言つたことは間違いだよ。真帆ちゃんがいつ例外じゃないよ。だから、真帆ちゃんを僕は探す」

言い切って、優しく笑いかける。

「……そうだな」

まったく、コイツには頭が上がらないな。無駄に口がうまい。顔がいいのに加え口も上手いからあんなにもてるのだろうか。

ハア。と、ため息を一つつく。

じゃあ椎名はここに任せせて、俺は組織に連絡でもして待つてるかな。

「修吾」

階段に向かおうとしていた修吾を呼び止める。

「なに?」

「椎名を口説くの、任せせるだ」

「怒るよ?」

「冗談だつての」

「勘弁してよね」

俺たちはお互いに軽く笑いながら、その場を後にした。

### 第3話～Hネミー～（後書き）

楽しんでいただけたのなら幸いです  
感想、批評などありましたらぜひお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1011d/>

---

滅し屋～夜空に咲く花～

2011年1月13日03時00分発行